護国寺の寺報

その想い

第１５号
発行人：谷泰智
Ｒ２年12月5日発行

☆大和修験會での活動

今年も大和修験會の富士山での修行に温かいご声援を賜りまして誠に有難うございました。また、例年ご案内差し上げている特別祈願・回向に於きましては、このコロナ禍にありながら今までで最多のお申込を頂きましたこと、重ねて御礼申し上げます。

以前にもお伝えしておりますが、大和修験會とは、護国寺と宗派を同じくする宮崎県都城市龍禅院の宮元隆誠師が代表を務める、あくまでも有志の会であります。同じ聖護院門跡の末寺として地方から本山修験宗の活動を盛り立てていこうと地道な活動を続けています。

私は今回で４回目の参加となりましたが、この會を起された宮元先輩にとっては今回が丁度１０回目の節目に当たり、昨年の修行を無事満行させていただいた直後から、我々はこの度の１０回目を記念すべき登拝として心待ちにしておりました。

しかし、ご承知の通り世界的なコロナ禍の影響を受け、富士山も宝永の大噴火（１７０７年）以降初の閉山という行政措置となり、あえなく我々の想いが実現することは叶いませんでした。

← 源頼朝が陣を張ったことに由来する陣馬の滝での滝行

↓ 富士山の麓　興法寺大日堂にて特別祈願・回向の厳修

けれども、富士の裾野を大きく回りながら、例年と同じ目的地である樹海を抜けた先の精進湖までの道中、我々は神仏の導きを認めざるを得ない、幾つもの誠に有難い感慨に出会うことができました。登拝は果たせずとも、「とにかく１０年！」という信念を抱きながら、ひたすらに打ち込んでこられた宮元先輩に感化され、この私にも「地元高知で本山修験の修行を！」という発願が生まれています。

☆日高村観光協会の自然体験メニュー

昨年の１１月に開業５年にして１００万人の来場者数を突破した村の駅ひだか。その村の駅ひだかに併設された日高村観光協会も発足してちょうど一年が経ちます。

現在、体験観光メニューとしては９種類が設けられており、特にその中の『説法体験』、『修行の一日体験』、『猿田洞ケイビング』の３つに私も一ガイドとして深く関わらせてもらっています。

『説法体験』は護国寺で仏教の話や人生相談等が体験できる内容で、『修行の一日体験』は村の駅ひだかから大滝山に登り、山頂付近を散策した後山道で猿田洞に至り、また村の駅ひだかまで戻ってくるという、通算１２ｋｍを歩くなかなかハードな修行体験です。

その他にも、『大野くわ製造見学』、『湿地帯散策』、『レンタサイクル』、『屋形船仁淀川』、『仁淀川SUP』、『霧山茶園』など、地元の方でも意外と見落としがちな魅力に溢れた体験観光メニューがありますので、是非お買物ついでに協会にもお立ち寄りください。☺

回りて向かう　神様と仏様の違いとは？

この寺報で前々から申し上げている通り、護国寺の宗派は本山修験宗（ホンザンシュゲンシュウ）であります。簡単に言いますと本山修験宗は天台宗系の修験道ということになりますが、そもそも修験道とは古（イニシエ）より神仏習合または神仏混淆（コンコウ）という基本概念を軸にした民間信仰であります。今回は、そういう意味合いに於ける『神仏』つまり神様と仏様の違いについて、改めてお伝えいたします。

・日本の神様は唯一絶対神ではない

大前提として、そもそも日本で親しまれている神様と欧米や中東で信仰されている神様は実は全く概念が異なります。日本は山河草木が織りなす自然の恵みを土台とし、且つその中で営まれる豊かでありながらも厳しい自然の多面性が八百万の神々として日本人の感性の中に無意識に根を張っています。

一方、欧米で広く信仰されているキリスト教や、中東諸国さらには中央アジアや東南アジアで信仰されているイスラム教に於ける神とは、旧約聖書という共通の聖典に裏打ちされた神であり、その神は八百万の神々のように多神ではなく、『唯一絶対の神』なのです。参考までにお伝えすると、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三つの宗教は先述した通り旧約聖書を共通の拠り所としており、別名をアブラハムの宗教として原則的には同一の唯一絶対神、つまり同じ神様を信仰しています。その神様は全知全能でありこの宇宙の創造主であるとされ、その御名が三者三様にヤハウェと呼ばれたりゴッドと呼ばれたりアッラーと呼ばれたりしているのです。

話は戻って、初詣や七五三のお参りなどで我々が意識する日本の神々は雨之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）に始まり、イザナギ・イザナミの尊の国造りを経て大国主神（オオクニヌシノカミ）に代表される国津神（クニツカミ）、天照大御神（アマテラスオオミカミ）に代表される天津神（アマツカミ）の二局に体系化され、そして天孫降臨から神武天皇の東征によって歴代天皇と結び付けられ、やがて中世から明治にかけて日本の民族宗教『神道』の神々として意識付けられました。

・明治までの日本は神仏習合だった！

上で、「意識付けられた」と述べているのには訳が有りまして、実は奈良時代から明治までの日本は、神と仏を現代のように意識的に分けることを積極的にはしなかったようなのです。しかし、このことをイメージするのは意外と難しいのです。なぜなら、我々現代人は『日本土着の神道と大陸からもたらされた仏教』という二つの宗教が互いに影響しあいながら現代まで別々に続いていると認識しがちです。しかし実際には、西暦５００年前辺りから非公式に伝播（デンパ）していた仏教に対する一般レベルでの理解は、仏という存在があくまでも『外来の新たな神』として従来の土着の神々に加わったとするものであり、つまりそれは日本の風土的民間信仰の新たな神として仏が参入したという言い方が適切かもしれません。

ですが、一般民衆の中で数百年続いたその理解は、平安時代に空海が当時の最先端の仏教であった『密教』を質を落とさず日本に取り入れたことで変容します。その理解の変容とは、縄文時代から続いてきた風土的民間信仰を『日本の密教』として大きな器で捉え直すことでした。

それによって、当時一般的に親しまれていた神々から記紀神話に登場してきたそうそうたる神々でさえも、密教の広大な宇宙観の中で同じく捉え直されるようになってきました。その最たる例が『本地垂迹（ホンチスイジャク）』という新たに登場する概念です。

本地垂迹とは、密教の宇宙観に於ける仏が、日本の土着の神々の姿を借りて現れるとする考え方で、これによって日本の神々は仏教の中の密教という宇宙観の中で再配置されました。以後、明治初年の神仏分離令を経ても尚、本地垂迹に代表される神仏習合の名残は日本文化の至る所に顕著です。例えば、四国８８ヶ所霊場や全国各地の有名寺院の多くが、同じく有名な神社と境内を隣り合わせていること。これは、かつてそれらが寺社一体で信仰され、また機能していた証です。

・結局、仏様とはなんなのか？

どの宗派に於いても、仏様＝お釈迦様＝悟った人という理解が何よりも大前提です。ですが、成り行きを簡単に言うならば、インドに於ける西暦０年頃からの仏教は次第にヒンドゥー教の思想を取り入れ、やがては密教として生き永らえ、日本の平安時代の宗教界はもろにその影響を受けました。

ですが鎌倉時代前後になってくると、強烈な使命感とカリスマ性をもった現代の伝統仏教各派の祖師達が登場し、それぞれが経典や禅に基づく教理の差別化を繰り広げ、その中で仏の概念は様々に拡張されてきましが、「我々も皆で仏を目指そう！」とする志はどの宗派に於いても同じです。

檀家さんに聞く

共に歩んだ５０年　吉村奨憲（マサノリ）さん　７９才　佐川町加茂

１９６９（昭和４４）年に２本のレールを敷いた。５０年の歳月が流れた。苦しみ楽しみをわかちあいながらの５０年、仲の良い日々ばかりではなく、近よらず離れすぎずけんかもたびたびしながらも、廃線にすることなく２本のレールは今もかわりなくつづいている。この間に一姫二太郎を授かり、貧乏しながらも笑顔たやさず妻は頑張ってくれた。

三十有余年にわたりメシを食べさせていただいた会社、爪に火をともしつつ２人の子どもに高等教育を身につけさせてくれた妻、ただただ感謝しかありません。

これからやっと落ち着いて孫たちの成長を・・・という矢先、妻に脳出血の病魔。おっかけるように、１週間に３回（１回４時間）の透析の試練・・・。元気で明るい人を引きつける魅力ある性格とのギャップがあまりに大きすぎ、とまどう日々である。

透析は机上論としては理解していたが、本人の日々のつらさははかり知ることはできない。のこされた命のかぎり「杖」となり「足」となり妻の苦労に報いたい。

余生を第２章と位置づけ７９年間歩んできた道を反省しつつ、何かおかえしできればと・・・。心から妻に感謝状を送りたい。ありがとう！　※ 高知新聞 声ひろば 令和２年１１月１３日版より転載

上の文章は佐川町加茂本村にお住いの吉村奨憲さんが高知新聞の声ひろばに投稿され実際に掲載されたものです。毎夕、加茂小学校の校門の前に立たれ、子ども達を見守って下さっている吉村さんに、熱い想いをうかがってきました。

子ども達の声を聞くと元気になりますね！一日の始まりと終わりは子どもの声を聞いて・・・。今年はハロウィンをいろいろ考えてみたけんど、このご時世でやっぱり難しかったですねぇ。クリスマスにはまたなんかできたらな～と考えてます。

僕が一年早く退職したのが平成７年。それから６年ぐらい能津のゴルフ場へ、その後はゴルフ場での経験が買われてスポーツバーク佐川のグラウンドの芝生の管理を任されて１６年、そして今は完全にフリーになって挨拶運動やらせてもろうてます。孫がお世話になった縁もあって朝は佐川中学校のゲートの外で旗を持って、それから夕方は加茂小学校の佐川側の坂道の下で、『お宝発見パトロール』というゼッケンをつけて立ってます。

仕事をしよった時は気持ちはあってもなかなか時間がなくてねぇ。でも近所の前田三紀さんに声をかけていただいて、「是非やらしてちょうだいや！」ということになってねぇ。まぁでも、そもそも自分がそんな挨拶ができる子どもじゃなかったから、子ども達に頭ごなしには言えんので自分から率先してやる姿勢を見せないかんと思うてねぇ。こちらから子どもを喜ばせるんじゃなくて、なんか喜んでもらえるような活動ができたらえいなぁと思いつつ、でも結局は子ども達から元気をもらってます。

今はね、家内から教えてくれるんですよ、「お父さん、もう挨拶行く時間ですよ～」ってね・・・。いやぁ～、この歳になって振り返るとね、自分は本当にやりたい事をやらせてもろうちゅうんですよ。龍馬のフルマラソンから北海道は佐呂間の１００ｋｍマラソン、もっと言うたらゴルフ場に勤めゆう時は往復２０ｋｍの通勤ランをしてみたりとかね(笑)　でもそれらが出来たのは本当に家内のお陰です。家内に力貰って今までやらせてもろうたから、とにかく今自分が少しでも元気をお返ししたいと思うてね。

正直、自分は棺桶入った時が頂点やと思いゆうんです。そうするとやっぱり頂点までは頑張らないかん。一日一生懸命頑張って夜床に入って、もし明日目が覚めたら、また頑張ろう！そんなふうに思えてきてねぇ。今が一番充実しちゅうかもしれません。　（文：令和２年１１月１８日　加茂本村の御自宅にて）

お経のことば

六波羅蜜の解説　その４

般若波羅蜜（ハンニャ　ハラミツ）

空とは！？

今回で六波羅蜜の解説もいよいよ最終回となります。

２０１８年の９月に発行した第１２号での布施波羅蜜の解説に始まり、持戒波羅蜜、忍辱（ニンニク）波羅蜜、精進波羅蜜、禅定（ゼンジョウ）波羅蜜ときて続く般若波羅蜜は、ズバリ今までの五つの波羅蜜の実践を通して得られる『気づき』のことであり、またその気づきに依るが故の更なる実践を通して得られる『智慧（チエ）』のことです。

そもそも『般若』とはプラジュニャー（梵語（ボンゴ））の音写であり、もとの意味も『智慧』であります。難しい『慧』という漢字が使われているのは、これが暮らしの智恵や処世術的な智恵ではなく、俗世の慣習や駆け引きを超越した仏教の叡智という意味を込めているからです。

日本で広く親しまれている般若心経は漢字２６０文字余りで構成されていますが、その趣意は般若＝『仏教の智慧』の心髄を説いたお経であるとするのが定説です。しかし、一言で智慧と言っても仏教にはたくさんの智慧があるわけで、今回は宗派を超えて般若と結び付けられることの多い『空』を智慧の代表格として紹介いたします。

「一切は空である」とか「空の境地で臨む」等々、皆さんの日常でも『空』という言葉の持つ掴みどころのない仏教的な意味合いはだけは、（皮肉な言い方になりますが）図らずとも適切に使用されているのではないでしょうか？　しかし、「じゃあ空とはそもそも何ですか？」と誰かに問いかければ、それに即答できる人は僧侶であっても少ないかもしれません。小難しい定義や内輪の問答を一気に飛び越えて敢えてざっくりお伝えすると、空とは『無限の可能性』のことです。

誤解を招くといけませんが、空を敢えて「そら」と呼んで考えると、皆さんはどのような空を想像されますか？　青空、夕焼け空、夜明けの空、そして曇り空に夜空。少し想像するだけでもいろいろな空（そら）があり、またそれらの色はそれぞれが一色だけでは表現できず、多様で無限の分解能を備えてグラデーションしています。それと同じようにあらゆる現象や物事の状態、さらには価値観や好き嫌いの感覚、さらには哲学的な概念等々に至るまで、実はあらゆるものがそれ自体では絶対的な存在ではなく、無限の可能性に揺れているのです。

そのことを今から２６００年程前に看破され、その智慧と法に依って人間としての生命を全うされ、且つその事実を分け隔てなくあらゆる人々に説き続けてこられた人こそお釈迦様です。あらゆるものが絶対的な存在ではないことを、お釈迦様は『諸法無我（ショホウムガ）』と名付けられ、その理由としてあらゆるものは『複合的な関わり合い』つまり『因縁』によって存在していると示されました。ですから、話を六波羅蜜に戻して捉えると、この因縁、諸法無我、空を一まとめに般若の智慧の気づきとして体感することこそが六波羅蜜の要（カナメ）と言えます。

おさらいすると、先ず布施によって驕りを捨て本来の素直さに立ち返り、自身が果たしたい目標を持つことで道を定めて自らを戒める。そして踏み跡無き道で己を見失いそうになろうとも信念を貫く人もあれば、道中未知の宝物に出会うことで最初の目標自体が変わる人もいるでしょう。何度も自分に問いかけながらあらゆる扉をノックし続ける内に時間が足りなくなる人もいるかもしれません。しかし、本気でそれらの苦楽に立ち向かい続ける中で、人は必ず『気づき』を得るのです。一体その気づきとはなんなのでしょうか？　それは人それぞれでもちろん違っているのでしょうが、一つだけ共通するものがあるとすれば・・・、それは『優しさ』であると私は確信しています。

行事案内

詳細はまだですが、令和３年は久しぶりに本堂でコンサートを開きたいと思ってます！

毎月２８日の９時と３時から
本堂にて柱源（ハシラモト）護摩供養

本山修験宗　大瀧山護国寺
７８１－２１５５
高知県高岡郡日高村九頭２９１
☎　０８８９－２４－７２４
ホームページ
gokokuji.site